

「全鍍連」 2018年 12月号 いきいき地域

中国表面処理工業組合 副理事長 遠藤 巨城 (中備メッキ工業(株) 代表取締役)

「西日本豪雨と岡山」

7月6日から7日にかけて西日本を襲った豪雨は、広島、岡山、愛媛など各地で洪水、土砂崩れなど、近年まれにみる災害が広範囲わたって発生し、200人以上の死亡行方不明者を出す最悪の事態となりました。亡くなられた方々へのご冥福を心より申し上げます。

私の住む岡山県(倉敷市)の豪雨災害は県内ほぼ全域にわたり、住宅道路鉄道などに甚大な被害をもたらしました。その中でも真備地区の浸水被害は、地区全体の約30%(1200ha)が水没し、地域によっては、最大深度は4.5mに達し、家屋の2階の屋根部分近くにまで及びました。これは地区内に流れる小田川の水位が上昇し、下流で高梁川に合流するはずですが、高梁川の水位も高く、小田川へ逆流する現象(バックウォーター現象)が発生し、支流も含めて堤防が8ヶ所で決壊して濁流が市街地へ流入する最悪の事態が、深夜22時頃から翌朝の7時頃にかけて発生したため、住民には避難指示が出ていたにもかかわらず、避難が遅れて、人的被害が拡大する結果となりました。

全国的には、テレビ等の報道により、真備が注目されていますが、岡山平野は埋め立てと干拓によって築かれているため全体的に標高が低く、いたる所で浸水被害が発生しました。特に岡山市東区の平島と中心とした地区でも砂川の氾濫により、床上、床下浸水等した範囲は750haに及びました。県北の国史跡の津山城ではのり面が崩落し、高梁川上流の井倉洞では河川敷にある関連施設が濁流によって破損しました。各地の道路も復旧工事が多数のため、未着工のところもまだ残っています。JR在来線は県内10路線のうち、因美線、芸備線の復旧工事が遅れて、8月末までかかり被害の多さがうかがえます。

過去の洪水被害をふりかえると、明治26年、昭和5年と47年に大きな浸水被害を被った歴史があり、特に明治26年10月の洪水では、400人以上の犠牲者を出し、5万戸以上の床上床下浸水の被害が報告されています。ちなみに今回は約1.2万戸なので、被害の大きさがわかります。真備地区でも大きな被害が出たことが報告されています。

最近の豪雨災害は、地球温暖化の影響なのか、線状降水帯の発生など激しさを増しているようです。地震、台風などの災害も多発している昨今、我々めっき業界も、各種めっき液等を保有している以上、不測の事態にも可能な限り対応していくためには、BCP(事業継続計画)を策定するなど、今後の防災等の意識の向上を計っていく必要があります。

「晴れの国、岡山」を襲った、豪雨被害を肝に銘じて、今後に生かしたいと思います。